

Vol.2 19世紀 — 時代、建築、ゴットフリード・ゼムパー

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペ等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

建築への需要の増大

19世紀の建築は総じて、その外見から「様式主義」で括られるが、話はそれほど簡単ではない。細部を語り始めたら終わりのないテーマでもある。しかしここでは、その図像学的側面ではなく、当時の建築家にとっての意匠とは何だったのか、考えてみよう。

産業革命が本格化した19世紀、社会は経済に牽引れて急激に変化した。そういうインプットに対して建築家たちは、近代化そのものを拒んだり、新しい構造を投入して大空間を追求したり、労働者の住環境改善に尽くしたりしたのだが、すべてが様式に止まってアウトプットされた。そして、それにはそれなりの理由があった。

振り返ってみよう。15世紀のルネッサンスから19世紀に至るまで、ヨーロッパの建築は常に、ギリシャ・ローマの古典を範としていた。そして設計者たちは建築を中世そのままに、師匠から「術」として学んできたのである。さて、経済が発展すれば、建物に対する需要が多様化する。王侯貴族の範に習いながらも、独自の経済活動に貢献する建築を求め、新種の施主たちが登場したわけだ。そうして、従来のような徒弟制度による建築家養成では、数的かつ内容的に、時代の要請に応えきれなくなる。ではそれに、どういう対応がなされたのか。

アカデミーの建築教育

そこに新しく登場したのが、学校における建築教育だった。工芸博物館が設立され、市民たちの様式に対する鑑識眼の向上が目指されたように、古典ならびに過去の様式に関して蓄えられた、「学問的」なマニュアルにたがって、アカデミーで建築家の養成が図られたのである。

またそれに、考古学的発掘が拍車をかけた。古代ローマの遺跡ポンペイが火山灰から開放され、ナポレオンのエジプト侵攻でロ

ゼッタ石が発見され、イギリスによる中近東支配が進行し、古代文明への理解が飛躍的に進むこととなる。そこでは古典はもう、出発点ではなくなった。そういうものを整理・統括するものとして、19世紀の学問たる美術史が構築された。

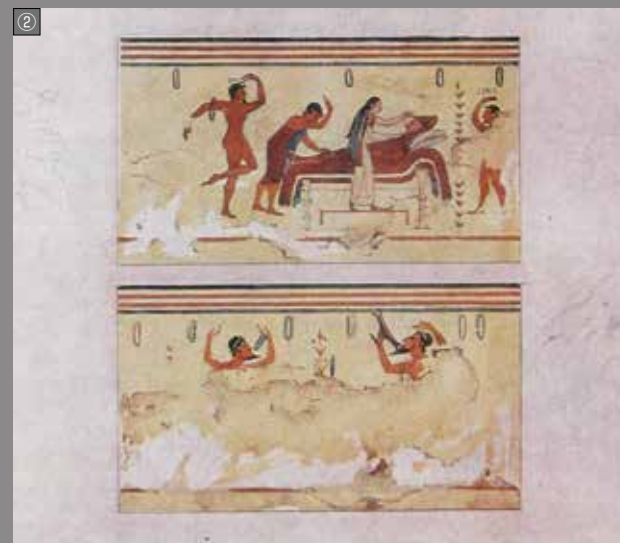
美術の一領域たる建築も、当然のことながら余波を被った。たとえばウィトルウィウス、従来の「術」とは、師匠の個人的見解を、それに付加したものであったが、そのオリジナルは検証されて、客観知となる。過去の諸時代のスタイルが分析され、篩いにかけて、一つの「様式」として定着する。アカデミーとは、そういう知識とその方法論を「学問」として習得し、実務に反映させるためのトレーニングを積む場であった。そういうマニュアル的姿勢をどう認識するのか、それを問うべきだ。

知的操作としてのデザイン

19世紀の設計とは、どういう作業だったのだろう。様式的約束事の枠内で建築の部位を吟味し、新しく構成されたコンテキストに、建築家独自のメッセージを細部に組み込んでゆくこと。それが見当外れでないなら、ここに新たな建築が創造され得ることは、否めない。

しかしそれを解読することは、容易ではない。我々の大多数には、ヨーロッパの故事古典に関する知識が備わらないし、それを踏まえた設計の評価も、一棟ずつ細かく分析することなしには適わないからだ。そういう建築家たちのこだわりは、その外見的特徴のみに基づいて、ネガティブな語感を伴う「ネオ」の諸様式に分類されることになる。

そういう、多様な選択肢があり、多様なコンビネーションが可能なところに、投入されたエレメントが響き合って、新しいものが醸し出される可能性。建築の設計はここにおいて、学問的・教養的なコンテンツを、視覚的なものへと翻訳する作業となる。これが日本が誇る書院とか茶室とかの、建築の作法に通じると感じるのは、そして丸の内の新しいオ



②ゼムパーによるエトルリア人の遺跡調査、スケッチが半端ではない
③「アクロポリス」部分 クレンツェ作、1846年、ギリシャ神殿の彩色を示す
④風化したギリシャ神殿のコラム。濃灰色の生地に下地として漆喰が施されていた
⑤河川沿いにゼムパーが計画した散策テラス、眺望が素晴らしい(筆者撮影)
⑥ゼムパーの様式論から2点、筆者によるコラージュ。プリ・ドリス式やエジプト柱の柱頭を比較検討してスタイルの展開を論考した。
⑦1860年当時のドレスデン、100年すると3本の左右に大きな塔が加わる
⑧ドレスデン、今日の対岸パノラマ、右端の劇場塔屋が神殿のようにポリウムを補うのが見事
出典/筆者アーカイブ(②)、ウィキペディア・コモンズ(③④⑤⑦⑧)、ゼムパー「様式論」1878年版(⑥)



フィス街の、互いに似通った建築を「様式的」と感じるのは、筆者だけだろうか。

銀行は重厚なドリス式とか、劇場は華やかなネオ・ルネッサンスなどと、説明するむきもあるが、それは「安藤さんの打放し」にも似て、建築の核心に触れるものではない。

ゼムパーの生涯

ここで、この先当連載が下敷きとする理論、それを唱えた建築家ゴットフリード・ゼムパー(1803-1879)を紹介しておこう。

ハンブルク生まれの彼は1823年に建築を志し、パリで活動するドイツ人建築家のガウに師事する。窮屈なドイツではなく、フランスの自由な雰囲気、多感な若者時代を過ごした彼。出入りするサロンの末席で、ギリシャ神殿をめぐる彩色論争に触れ、青年特有の正義感もあって、1830年にイタリア・ギリシャへと調査に出発。彩色派に勝利をもたらしたが、この建築行脚で、彼は彩色が内包す

る本質の意味を認識する。

功成ったゼムパーは1834年、ドレスデンの建築アカデミーに招聘され、宮廷建築家としてドレスデンの都市改造に尽力。しかし、彼は1849年にドレスデンの市民革命に参画し、死刑の判決を受けてパリに亡命。1851年のロンドン大博覧会に接して、時代の動きに曝された建築の将来に懸念を抱く。

そして1855年、彼はチューリッヒ工科大学に招かれて、建築学科を開設。学問の世界に活動の場を見出したゼムパーは、青年期から培ってきた建築論の執筆に着手する。三部作として構想された大著『様式』。最初の二巻は出版に至ったが、近代の素材たる鉄とその造形をテーマとする第三巻は、囑望されながらも日の目をみなかった。

人生も秋を迎えた1869年、ゼムパーは皇帝の招聘を受け、ウィーンの「カイザー・フォーラム」の統括者に就任。チューリッヒを弟子に任せてウィーンに移るが、協同者たる地元の建築家との確執に疲弊し、1876年に

職を辞してローマに引居。1879年に病で、その生を終えた。

時代の人だった建築家ゼムパー

ゼムパーの後世にとっての意味は、革新的な作品や都市修景に止まらず、そのユニークな建築論にある。19世紀的な様式的細部へのこだわり。ラテン語を解する実務家であろうとする彼の、ものの成り立ちに関する考察は、様式の範疇を遠く超えて、人間の生きるという営為との関連において展開される。それがウィーンの、文化的に豊かな土壌に根ざして、20世紀初頭に新建築として花開いたのだった。だから、ウィーンの建築を、ゼムパーの論を近代に馴化させる、その試験的過程と見做すこともできる。そしてさらに言うなら、彼の論考は今日においても、その有効性を保持しているのだ。次回はこのゼムパーの建築論について、お話したい。

(続く)



①「建築家の夢」 コール・トーマス作 1840年、この境地、筆者にはよくわかる 出典/ウィキペディア・コモンズ